

彦根城の一点観光から「まちなか観光」へ ―彦根市―

社団法人中部開発センター

客員研究員 青山 征人

中部開発センターでは、景観に関する意識調査やセミナー、シンポジウム、機関誌を通じて、景観法の仕組みや各地の事例を紹介するなど啓発活動を行ってきたが、今後は中部圏各地の具体的な取り組みを紹介することによって、景観意識の高揚、「美しい国、まちづくり」を推進していきたい。

はじめに

古来、「近江を制するものは天下を制する」といわれたように、天下人を夢見た、つわものはまず近江の制圧に心血を注いだ。東国、西国、北国を結ぶ交通の要衝として、ここを抑えない限り天下が望めないためである。関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、西への抑えとして井伊直政を抜擢し、佐和山（彦根市）に城作りを命じた。以来400余年、彦根市は譜代筆頭の35万石の城下町として栄え、近代には繊維、彦根仏壇、バルブの産地として発展した。少子高齢化の到来、地場産業の低迷などで昨今は苦戦を強いられている。彦根市の財政は実質公債費比率が21.7%と県内で最悪。厳しい行財政改革を迫られる一方、新たな財源作りを模索する。そうした中で、将来の発展策として彦根城など歴史遺

産を活用、「歴史と伝統を語りかけ深みのある風格が漂うまち」を目標とした景観計画を推進し、彦根城の一点観光から、城下町全体を整備する面的整備をして、世界文化遺産登録を目指す。3月からは彦根商工会議所などと「国宝・彦根城築城400年祭」（11月25日まで）を開催、大勢の人で賑わっている。彦根市には、彦根城のほか中山道の2ヵ所の宿場や神社、仏閣など歴史遺産が多数残されているほか、周辺市町にも多数あり、これらをネットワーク化することによって京都、奈良に次ぐ観光都市としての活路を見出す。滋賀県全体にいえることだが、国宝を含む重要文化財数で、東京都、京都府、奈良県に次いで全国4番目の恵まれた地位にありながら、ネットワーク化やソフト面で遅れをとったため文化観光都市化が進まなかった。



写真1 3月21日に行った彦根城築城400年祭の開会式。近藤文化庁長官を真中に右から井伊家18代当主、徳川宗家18代当主、嘉田知事らがテープカット。後ろには「井伊の赤備え」具足の武将が並ぶ。



彦根城築城400年祭キャラクター「ひこにゃん」

I 歴史の宝庫・近江

1 信長・秀吉・家康が駆け巡る

彦根市は、市の東西長さが22.5km、南北長さが12.35kmで、面積が98.15km²。また人口はわずかながら増加しているものの、11万人（05年）にとどまり、滋賀県では大津市、草津市、東近江市に次いで4番目である。明治新政府が誕生した折には、県庁所在地が彦根に置かれてしかるべきであったが、大津にもっていかれ、さらには京都、大阪の経済圏から離れていること、また三方が山、一方が琵琶湖に面し、開発面積が限られることから戦後の高度経済成長の波に乗り遅れた。

元々この地は、松原内湖（ないこ）遺跡（彦根市松原町）や福満遺跡（同市西今町）に見られるように古く縄文後期から人々が暮らしを営んできた。松原内湖遺跡からは丸木舟が12艘出土しており、早くから漁労や水運が盛んであったことを物語る。7世紀の律令国家成立とともに、彦根市は近江国に組み入れられ、都から東国に向う東山道（後の中山道）が整備され、鳥籠駅（とこのうまや＝東山道と芹川が交わる付近）が設置された。このあたりは672年に天智天皇の後継を巡って、弟の大海人皇子と皇太子である大友皇子が争った壬申の乱の主戦場でもあった。東大寺、延暦寺などの寺院や貴族の荘園支配が揺るぎ始める鎌倉期以降、武士による領地の強奪が始まり、彦根というより近江全体が戦乱の渦に巻き込まれていった。近江守護佐々木氏による支配から、室町期には京極氏、六角氏の争い、さらには浅井氏の台頭などを経て、1568年（永禄11）には織田信長が將軍足利義昭を奉じて上洛を目指し、佐和山に橋頭堡を築く。2年後の1570年（元亀元年）には姉川をはさんで浅井長政・朝倉義景連合軍と対峙し、これを打ち破った。姉川の合戦である。信長は1576年に安土城を築くまで、岐阜城と京都を往復する中継拠点として佐和山城を利用したが、1582年に京都・本能寺で倒れると、豊臣秀吉が後継者となり、佐和山城を腹心の、石田三成に与えた。さら

に秀吉が死ぬと、5大老の筆頭、徳川家康が天下取りに行動を移し、反家康の立場の前田利家、石田三成と対立、全国の大名が東西に分かれて戦う関ヶ原合戦に突入した。

2 井伊直政の入封

関ヶ原の戦いで井伊直政は徳川軍随一の功績を挙げた。1600年9月15日の朝8時、西軍の宇喜多秀家に仕掛けて戦端を開くとともに、激しく攻め入った。西軍の敗走が明らかになった午後、戦場に孤立した島津義弘・豊久の薩摩勢が家康の目前を堂々と敵中突破を図った時には、呆然と見守る徳川軍をしり目に、直政は本多忠勝とともに島津を追撃し、義弘にこそ逃げられたものの、豊久に手傷を加え自刃に追い込んだ。敵中突破を開始する時600人いた島津軍のうち、薩摩にたどり着いた時には60人にまで減る激しい戦闘で、直政自身も右腕に銃弾を受け、落馬した。それでも石田正継、正澄一族が立て籠もる佐和山城攻撃では軍監として参加した。

こうした関ヶ原合戦の功績が認められ、直政は三成の所領15万石と上野国3万石の18万石を与えられ、佐和山城主に取り立てられた。しかし島津追撃時に受けた鉄砲傷が悪化して赴任1年で死去した。直政は生前、荒れた佐和山城より他の場所



写真2 石田三成の重臣であった島左近の屋敷跡に建てられたと伝わる清涼寺。井伊家の菩提寺で、裏には歴代藩主の墓所がある。隣には井伊谷郷（遠州）から移建開山した龍潭寺（りょうたんじ）がある。

に城を築く考えを持っていたとされ、直政の子、直継は北方2 kmの現在地の彦根山に1604年から築城にかかった。

3 彦根城はリサイクル城

城普請は、大坂冬の陣、夏の陣で一時中断しながらもおよそ20年の歳月をかけて1622年頃に完成した。工事は前半が内堀によって囲まれた本丸、西の丸、鐘の丸など城の核心部分を築き、後半の工事は周囲の櫓（やぐら）、堀、家臣団の屋敷などであった。天守閣は高さ21mと決して大きな規模ではないが、丸みを持たせた唐破風や千鳥破風を縦横に取り入れた変化に富んだ、優雅な外観を示しており、国宝に指定されている。ちなみに現存する天守閣で国宝に指定されているのは彦根城以外で姫路、松本、犬山城の3ヶ所。彦根城のすばらしさは、天守閣だけが残されている裸城とは違うこと。二重の堀、4つの櫓（いずれも重要文化財）、門、大名庭園など江戸時代さながらの姿をとどめている。興味深いのは、彦根城の築城に当っては、佐和山城をはじめ秀吉の住んだ長浜城、信長の安土城、京極家の大津城など近辺の城や寺からの、木材、石材を再利用したりサイクル城であること。西への押さえとして建設を急いだせいでもあるが、天守閣は大津城、天秤櫓は長浜城大手門、太鼓櫓は佐和山城から移設、土台や石垣の



写真3 彦根城天守は京極高次が築いた大津城を移築。いくつもの屋根様式を組み合せ、重厚な中にも優雅さをただよわせる。(国宝)「登城」するには1時間待ち。

石材は佐和山城などほとんど残らないほど徹底的に取り尽くした。残念ながら、政務を行う表御殿は明治の初めに取り壊されたものの、市制施行50周年記念事業として、彦根城博物館として蘇った。

4 埋木舎（うもれぎのや）と井伊直弼

彦根城の入口近く、中堀に面した武家屋敷は幕末の大老、井伊直弼が17歳から32歳まで15年間を過ぎた埋木舎である。直弼は、自らを「生涯、花の咲かない埋もれ木」にたとえ名付けた。11代藩主直中の14男として生まれたが、世継ぎになる見込みはなく、また養子縁組の口もないままに不遇の時代をおくった。しかし藩主候補の兄が次々世を去ることで直弼に13代藩主の座が回ってきた。



写真4 天秤櫓（重文）は秀吉の長浜城大手門を移築したといわれている。手前の橋は廊下橋と呼ばれ、非常時には落とされる。



写真5 4代藩主直興なおきが造営した大名庭園の玄宮園げんきゆうえん。江戸時代初期の庭を現代に伝える名園で建物は鳳翔台ほうしょうだい。ここでの薄茶は又格別。



写真6 幕末の大老、井伊直弼^{なわすけ}が15年間を過ごした埋木舎。邸内には茶室が残っている。ここでの蓄積がベースとなって、日本を開国に導いた。

世は幕末の激動期。1858年徳川幕府の大老に就任するや、日米修好条約を締結し開国を進める。また幕府13代将軍、家定の後継問題で、水戸家出身の慶喜（よしのぶ、当時17歳）と紀伊家の慶福（よしとみ、同8歳）が候補に挙がり、譜代、大奥など両派に別れて擁立運動が展開された中、直弼は次期将軍を慶福に決め、家茂と名乗ることを発表した。天皇の許可なく開国を決め、さらに14代将軍擁立を断行した直弼に対し、攘夷派は激しく反発したが、直弼は批判的な吉田松陰などを一斉摘発した。安政の大獄である。強引さが災いして1860年には江戸城・桜田門外で水戸藩を中心とする攘夷派に暗殺された。歴史的評価は今もって分かれる直弼だが、その言動は15年間の埋木舎生活で培われたことは確か。

5 中山道鳥居本宿と高宮宿

彦根市は、旧中山道の宿場町を2つもかかえる。観光の目玉探しに頭を痛める他の市町にとってはうらやましい限りであろう。しかし両宿とも手入れがなされていなくて、倒壊寸前の民家があるなど、早急な対策が望まれる。獅山向洋（ししやま・こうよう）彦根市長は「保存する案件が多すぎて、宿場に手が回らなかった」と率直に認め、今後は宿場を含めた景観計画を立案、実行していく。鳥居本宿は、中山道69次のうち、江戸・日本橋から



写真7 中山道の宿場としては2番目に栄えた高宮宿。看板さえなければ、140年前にタイムスリップする。



写真8 中仙道69次のうち、江戸から数えて64番目が鳥居本宿。昔ながらの建物は姿を消しつつあるが赤玉神教丸本舗は現在も営業中。

数えて64番目。安藤広重の版画には鳥居本宿を「峠の茶店から琵琶湖や竹生島を見下ろす絶景の場所」として描かれているが、これは番場宿と鳥居本宿のあいだにある摺針峠から見た風景であり、宿からは見えない。北国街道が分岐し、朝鮮人街道が合流する要衝にあり、豪壮な構えの薬屋「赤玉神教丸本舗」や道中合羽を売った店が残っているが、旅籠や民家は空き地や新住宅に変わり、倒壊寸前の古民家も多い。鳥居本宿を出て、右手に彦根城を望みながら6km京都に進んだ65番目の宿が高宮宿。宿場町としてだけでなく、多賀大社の門前町や高宮上布（綿や麻で織った軽く薄い上質な織物）を扱う問屋街として発展しただけにかつては本陣1、脇本陣2、旅籠23所を有する大宿場。中山道では埼玉県の本庄宿に次ぐ2番目の規模を誇った。今も町屋形式の家屋が軒を連ね、郵便局

など公共建物も景観に合わせるなど保存状態は良好。

II 彦根市の動き

1 「ひこね21世紀創造プラン」後期基本計画を策定

彦根市は、総合計画「ひこね21世紀創造プラン」(2001年—2010年)の後半5年間部分を見直し、新たに「後期基本計画」(06年—10年)として策定した。予想以上に早く少子高齢化が進むことや財政環境が厳しくなっており、限られた予算での「選択と集中」が求められるとして、全ての事業を見直し、効率的で効果的な行財政運営を進める。後期計画によると、将来人口を当初2005年には11万6000人程度、2010年には12万人程度と見込んでいたが、実際には2005年で10万7860人と想定したのに比べて増加率が鈍化。世帯数も同様に伸び悩んだ。このため将来人口を12万人から11万6000人に、また世帯数も4万5000世帯から4万3000世帯に引き下げた数字を基に事業を見直した。しかし次世代支援策や地震防災対策は他の課題より優先させる必要があり、苦しいところ。そんな中で、豊富な歴史文化資産や雄大な琵琶湖、さらには鈴鹿山地、佐和山など自然環境を活用したまちづくりを行い、魅力ある観光都市づくりを推進する。

2 彦根市の景観計画への取り組み

彦根市は93年12月に「彦根市都市景観基本計画」を策定し、96年には「快適なまちを創る景観条例」を制定した。景観形成に影響を及ぼす大規模建築物の届出制度を開始し、2002年10月には彦根城周辺地域150haを重点地域に指定し、歴史的景観の保全に取り組んでいる。重点地区では建物の高さを15m以下に、屋根は日本瓦の勾配屋根に規制するなど厳しいもの。さらに同市は景観法に基づく「彦根市景観計画」(素案)を07年1月にまとめ住民説明会を開始した。市域全体を「景観計画区

域」とし、うち「景観形成地域」として、特性によって①琵琶湖・内湖地域②朝鮮人街道・巡礼街道沿道地域③国道306号沿道地域④芹川河川景観地域⑤城下町地域の5地域に分けた。当初は中山道宿場町地域を含んだ6地域でスタートしたが、宿場町について今回は見送った。多くは住民が生活を営むだけに、住民への丁寧な説明及び景観への住民理解が不可欠といえる。

3 商店街整備と彦根城築城400年祭

彦根城の西側に「夢京橋キャッスルロード」と「四番町スクエア」の2つの商店街が誕生したことを知らない人は多いと思う。「夢京橋」は85年から都市計画道路本町線の街路整備事業として進められ99年に完成した。道路幅を3倍に広げ、城下町の風情を損なうことないように、道の両側に白壁、黒格子、いぶし瓦、切妻屋根に統一した和風建屋を建て、伝統的な街並みを再生した。ここではびわこ銀行は両替商だし、トイレは厠(かわや)。近江牛を食材としたレストランや名物のふなずし、佃煮、みやげ物店のほか、美容室、新聞販売店など多彩だが、城郭の雰囲気にも溶け込んだ、しっとりとした商店街である。その隣接地に「街なか再生土地区画整理事業」として05年に完成したのが「四番町」。こちらは一転して大正ロマンをコンセプトに、明治・大正時代をイメージした明るい建築意匠を取り入れた店が建ち並ぶ。元々市場商店街だけに魚屋など食べ物に関する店が多いが、ファッションの店やギャラリーなどがあり、ヤングもシニアも楽しめる。両商店街とも換地など難しい課題が山積した中、行政、民間を交えた徹底的な話し合いで克服した。観光客は彦根城を見学して、両商店街を回るといって、より魅力的な「まちなか観光」が実現した。

彦根市では、これら施設が完成したことと、彦根城築城400年に当ることから、3月に「築城400年祭」をオープンした。普段は見学させない重文の西の丸三重櫓や天秤櫓を開放するとともに、ワダ・エミ衣装展や井伊家14代物語などイベントを



写真9 道路を三倍に広げ両側に白壁、黒格子、いぶし瓦の歴史的景観を再現した「夢京橋キャッスルロード」。



写真11 昼食はキャッスルロードで「近江牛肉和風コースステーキ重」を食べた。2,980円。将軍家と徳川御三家に贈りとどけていた彦根牛肉の味噌づけを直弼の代になってピタリとやめたのが水戸藩・斉昭との不和となり、後年桜田門外の変を引き起こしたとの説もある。



写真10 大正ロマンをコンセプトに、ノスタルジックないやしの空間を再現した「四番町スクエア」。元は彦根の台所ともいふべき市場商店街だった。魚屋、佃煮屋が多い。



写真12 明治から昭和初期に活躍したヴォーリズが設計した滋賀大経済学部の講堂。

用意、全国からの誘客を図っている。4月末現在の彦根城入場客数は見込みの13万5900人を大幅に上回る18万9000人に上っている。食事処としては近江牛を使ったレストランが何ヶ所かあるほか、城の入り口で弁当を売っている。大名気分を味わいたい向きは玄宮園内の八景亭でゆったり食べるのもよい。値段は6000円（税・サ別）。

■感想

彦根城は92年に世界文化遺産の「暫定リスト」に登録された。しかしリストに載ったまま、原爆ドームや奈良、日光、熊野古道など他候補に次々

追い抜かれ、16年目を迎えた。審査するユネスコの国際記念物遺跡会議（イコモス）が「（城では）姫路城が既に登録されている」と難色を示したという。「あちらの天守閣は確かに立派だが、あとはなにもない裸城ではないか」という彦根側の言い分は十分理解できる。しかし批判しても成果は得られないとあって、彦根市では、姫路城との差異を明確にしたコンセプトを構築し、それを実現して登録にこぎつける考え。城址の保存整備はもとより、庭園、武家屋敷、城下町など江戸時代さながらを再現するだけに資金、住民の協力など苦労は多いが、是非成功してもらいたい。現存する江戸時代からの木造城郭は12城、うち国宝は4城

常の1.5倍の55万人くらいは見込めると判断していた。ふたを開けたら予想外といったら怒られるが、滋賀県内に限らず、各地から大勢の人に来ていただいている。秋にはイベントを開催するため予想した数は達成できると判断している。

—400年祭を開催した狙いと同祭の見所は。

獅山 見所から説明する。重要文化財の西の丸三重櫓や、天秤櫓、馬屋などの一般公開である。日頃は非公開だけに、是非この機会に内部を見てもらいたい。佐和口多聞櫓（開国記念館）を含め3櫓では、世界的な衣装デザイナーであるワダ・エミの衣装展（5月末で終了）や井伊家14代物語、彦根城で撮影した映画「武士の一分」展などを開催。また彦根城博物館では「ほんものとの出会い—百花繚乱」をキーワードに彦根城や井伊家、井伊家伝来の武具、刀剣、能衣装、茶道具など歴史的、文化的評価が高いものを見てもらうとともに、日頃非公開の木造御殿内部を公開している。来館者には本物にしかない華麗さ、重厚さを感じ取ってもらえればうれしい。城外では「彦根まちなか博物館」と題し、明治期の三代書家のひとり日下部鳴鶴コレクション、近江鉄道コレクション、犬の玩具その数日本一の高橋狗佛コレクション展を3ヶ所で開催している。

開催の狙いは、彦根観光の見所が変わったことを一般に知ってもらいたかった。従来は彦根城だけの一点観光で、観光バスが来ても、そそくさと城だけ見て、北陸や中部へ向う通過型観光地だったが、「夢京橋キャッスルロード」や「四番町スクエア」を整備したことで城とまちなかをゆっくり回りながら楽しんでいただくことができるようになった。このまちなか整備では国土交通省の観光大賞をいただいた。彦根には城のほか、中山道の鳥居本宿と高宮宿や神社・仏閣など見所が多数ある。高宮宿は中山道で本庄宿に次ぐ2番目に栄えたところで、昔ながらの建物が今も残っており、今後の景観計画の中で、整備していく。よく他の市長さんから「彦根市は伝統的建物や琵琶湖など自然環境に恵まれている」とうらやましがられる

が、11万人規模の小市では財政的に厳しい。せめて30、40万人規模の市であれば文化財の保存に予算を使うことができるが。

—長期計画「彦根21世紀創造プラン」の後半部分を見直しましたね。

獅山 基本的には変わらないが、5年経過して情勢が変わったことで多少見直した。少子高齢化が予想以上に進み、当初10年後には12万人くらいには増加すると見ていた。ところが人口増加率が鈍り、11万6000人くらいにしかならない。税収増が期待できないばかりか、高齢者対策など経費は増える一方である。そこで次世代育成支援策を積極的に推進するとともに、地震防災対策の強化を進めることにした。元々21世紀創造プランでは「にぎわい新城下町プロジェクト」など9プロジェクトを推進していくとしており、計画通り実行していく。

—彦根市は早くから都市景観に取り組んできましたが、今後は景観法に基づく計画を進めていく訳ですね。

獅山 今年1月に彦根市景観計画の素案をまとめ、住民説明会を開始しました。城下町150haを含む400haを対象とし5つの案件に分けて、計画作り、情報公開、整備を進める。市内には重要文化財を含め歴史遺産が多数あり、どれから手を付けるか、優先順位を決めるのは難しい仕事になる。最終的には都市計画審議会で決めてもらうが、建物、地域によっては現在人が住んでおり、同意を取り付けるのが大変。中には「指定を受けたら規制され、自由が効かなくなる」として、早めに壊して、新しい家を建ててしまう人もおり、住民、市民に理解していただくことが大切だと思っている。京都などは、観光で生きていくという考えが市民に浸透しているのに対し、彦根は遅れているのか、「彦根市は観光都市ではない」とか「観光で儲けようとは思わん」など否定的意見が出る。これも観光で利益を得ている人が少ないためだが、滞在型観光都市に脱皮すれば、雇用が増え、理解が得られるだろう。そのためには観光客に出

来るだけ長い時間、彦根に留まってもらうようにハード、ソフト面で改良していかなければならない。

また周辺市町にも多賀大社、湖東三山など観光資源が多く、システム化、ルート化して、観光客に滋賀県内に宿泊せざるを得ないような状況にもっていく必要がある。すでに滋賀県や彦根市、滋賀商工会議所連合会などで構成する近江歴史回廊推進協議会など広域観光を推進する団体が立ち上がっており、今後は広域ルートの作成などの観光客誘致策を進めて、滋賀県の魅力を内外に発信していきたい。

—課題は景観保全と財政再建を両立させることだと思う。財政状況はどうなっていますか。

獅山 滋賀県26市町の中で一番悪いのが彦根市である。実質公債費比率が21.7%と20%の壁を超え、起債には県の許可を必要とする。借金が増えたのは、他市より遅れていた下水道整備を急がせたことと、新たに市民病院を新設したためである。持ち家を購入する時、頭金なしに買うようなもので、返済に苦勞している。だから400年祭も、費用をかけずに、できるだけ知恵を絞って開催することにした。3月21日の開会式典で地元テレビ局が生中継してくれたが、彦根市にはPRする予算がない。民間にお願いして3社にスポンサーになってもらった。これからの行政はなにもかも自分でやるというより、仲介の立場で民間に声をかけ、民間の力でやっていただく方向にもっていく必要があると考える。

最近、彦根市が見直されていることを喜んでいて。派手に宣伝した訳ではないのに、彦根城の来場者が増えているし、マンション、戸建住宅とも新しく建ち出した。京都や大阪へ通勤する人が買い求めるだろうが、彦根市のよさ、住みやすさを認めていただいた証拠と思うと同時に、人口が増えるのを素直に歓迎したい。

—広域合併についての考えは。

獅山 彦根市がある滋賀県犬上郡はこれまで多く

の合併を繰り返し、残ったのが多賀町など3町。3町と彦根市が合併の方向で合併協議会を立ち上げ、住民の意向調査をした結果、彦根市の場合は「合併反対」が圧倒的に多くて立ち消えになった。滋賀県は今後、合併協議会をつくれ、と勧告してくると思われるが、われわれは住民の意向を十分尊重していきたい。彦根市も過去何度か合併をしてきたが、合併してどんな意味があるのか考える必要がある。合併した地域と融和するためには大変な努力がいる。

—彦根城の世界遺産登録について教えてください。

暫定リストに載ったままですね。

獅山 時間がかかり過ぎている。国会が世界遺産条約を批准した92年9月に、彦根城は暫定リストに登載してもらったが、その後はどんどん追い越されていく。文化庁の見解によれば、姫路城という同種遺産が存在することにユネスコが難色を示しているのが理由。

天守閣の規模は確かに姫路城が大きい。しかし門、櫓、家臣団の住居、大名庭園を含めた江戸時代の遺構となると、こちらが上位と自負している。このため市では世界遺産担当部局をこれまでの教育委員会から企画振興部に移して、姫路城との違いを徹底的に明確にするとともに、彦根城独自のコンセプトを打ち立てていく。同時に楽々園や玄宮園、足軽屋敷なども整備して城下町全体を保存することで姫路城との違いを示していきたい。それでもだめだというなら、近くにある安土、佐和山、小谷城や姉川、賤ヶ岳など古戦場をまとめて「近江の城と古戦場」として申請するなり、琵琶湖の自然遺産と文化遺産を組み合わせる複合遺産として申請するなど方法を考えていく。

—ありがとうございました。最後に1点だけ申し上げます。400年祭を開催していることを関ヶ原以東の人は知らないと思う。もっと関東、中部に宣伝したらいかが。

獅山 中部や関東に対して宣伝をしたいが、予算が限られている。メディアも地域が違くと版が違

うため、400年祭は取り上げられていないと思う。
しかし会期は11月までたっぷりあり、なんとか予算をやりくりして宣伝し、関ヶ原以東の人に来ていただき、彦根の変ったことを見てもらいたい。